

## 母子関係のアセスメント：展望

筑波大学大学院(博)心理学研究科 松尾 和美

筑波大学心理学系 小川 俊樹

Assessments of the mother-child relationship: A review.

Kazumi Matsuo (*Doctoral Program of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8725 Japan*)  
and Toshiki Ogawa (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8725 Japan*)

It is important for understanding individuals developmentally to capture their mother-child relationship in childhood. To assess the mother-child relationship retrospectively, there are two different approaches; the objective and the projective. Objective assessments explain the relation through the rearing behavior of parent, and on the other hand, projective assessments illustrate it with vivid images. In this paper, we reviewed various measurements and discussed the possibility of more sophisticated assessment techniques.

**Key words:** mother-child relationship assessment childhood image technique

### はじめに

子どもの性格・態度・行動などの形成に日常的に関わりが多い親の影響が大きいということは言うまでもないであろう。また、子どもの青年期以降の精神的疾患の発症と幼児期の親との関係のあり方の関連も論じられている。また近年、青年期の問題への幼児期の家族影響、特に母親との関係の影響を重視する傾向がひろまり、幼児期の母子関係への関心は高まっている。そのような関係を実証的に検討するために、青年に幼児期をふりかえってもらい自分のうけた養育や幼少期における親との関係を尋ねるという形式で母子関係をアセスメントすることが多い。しかし、そのような方法には次のような困難さがあると考えられる。まず青年に幼児期の親との関係を尋ねるというアセスメントの対象となる時期とアセスメント時期との間に長い時間間隔があるという点である。また、子どもの性格は親自身による養育態度の評定よりも子どもに認知された母親の態度の評定との相関の方が高い(森下, 1981)とされているが、青年にレトロスペクティブに想起させるために子どもの主観による色づけがなされる余地が大き

いという点もある。それに加え、母親との関係は幼児期以降も連続しており、母親との関係は環境の変化や子どもの発達に応じて変化していくものである。そのため、アセスメントされた母子関係は幼児期に子どもが認知したものをとらえているのだろうかという疑問や、子どもの中の母親像が現在の母親との関係の影響によって変化してしまっているのではないかという可能性を生じさせ、これらの問題をより複雑にしている。

本論文では、幼児期の母子関係について青年からの自己報告形式でとらえるよう開発されているアセスメント法を展望し、各種のアセスメント法の長短を比較検討する。ただし、母親との関係だけに焦点を当てたアセスメント法は数が少ないため、両親を対象にしたもののうち、父親・母親それぞれについてを別個に尋ねる形式のアセスメント法も含め取り上げた。

### 養育行動・態度を通して母子関係をアセスメントする方法

一般に、質問紙を用いて母子関係をアセスメント

する場合、日常の具体的な生活場面に基づいた親の行動・態度を質問項目として設定し、親がどのような考え方・態度・行動をしているか、また子どもがそれをどのようにとらえているのかを客観的に数量化することを試みている。

### 1. 養育行動の内容からアセスメントするもの

スウェーデンにおいて Perris et al. (1980) は、親の養育行動に関する記憶をアセスメントするための質問紙として EMBU 尺度 (Egna Minnen av Barndoms Uppfostran あるいは Egna Minnen Beträffande Uppfostran) を開発した。この尺度は虐待・物を与えない・罰を与える・面目をつぶす・拒絶・過保護・過干渉・寛容・情愛的・成績重視・罪悪感を生じさせる・激励する・兄弟をひいきする・本人をひいきするという14側面の養育行動に関する81項目および両親の養育行動の一貫性と厳格さなどに関する4つの付加項目からなる自己記入式の調査票である。因子分析の結果、『拒絶』・『暖かさ』・『過干渉』・『ひいき』という四因子が抽出され、Arrindell et al. (1986) によって作成されたオランダ版でもオリジナルの尺度と同様の因子が確認されている。

一方、染矢ら (1996) は EMBU 尺度の日本語版を作成し、『拒絶』・『情緒的暖かみ』・『過保護 (成績重視)』・『過保護 (過干渉)』・『ひいき』という五因子が抽出した。しかし、『過保護』と命名された二つの因子をあわせて信頼性係数を算出したところ十分な値が得られたため一つの因子としてまとめても問題ないとし、日本においてもスウェーデン版・オランダ版と同一の因子構造が得られたと報告している。

この尺度の質問項目は、「食べられる以上にもっと食べなさいと言いました」といったように状況の設定が具体的であったり、「私を抱きしめてくれました」「私を誉めました」など親のとった養育行動を直接尋ねたりする項目が多くなっている。しかし、特に子どもが幼い時には、親は生命の維持には欠かせない養育者であり、自分を愛し守ってくれる保護者でもあり、子どもをしつけ、教え導く教育者の役割もとるなど、さまざまなモードで子どもと関わることから、EMBU 尺度のように日常場面の具体的な親の行動から母子関係をアセスメントしようとするとき、その項目が多くなってしまうのはやむを得ないことであると思われる。これにより詳細な情報が得られる反面、この尺度は全85項目もあり、オリジナルの実施法に準じて父親・母親それぞれについて評定を求めた場合、30分程度の時間を要する (門脇・染矢・高橋, 1997) など対象者の負担が大き

いという難点がある。

### 2. 養育行動の性質からアセスメントするもの

Parker らはオーストラリアにおいて青年および成人のうち病患者的の幼少期の親の養育態度の特徴を明らかにするために、親の養育態度をレトロスペクティブに尋ねる質問紙、Parental Bonding Instrument (PBI) を作成した。PBI の質問項目は全25項目で、養護 care 項目 (12項目) と過干渉 overprotection 項目 (13項目) により構成されている。養護項目は愛着・暖かさ・共感・親密さを測る項目であり、質問内容は、「私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた」や「私が必要とするほどは助けてくれなかった」というものである。また、過干渉項目は統制・侵入・過剰接触・幼児扱い・自立的行動の妨害という項目からなり、質問内容としては「私を子供あつかいしがちだった」「私自身に決定を下させた」という項目がある。各個人について養護得点と過干渉得点が算出され、二得点の平均点を原点とし、養護因子・過干渉因子を縦・横軸として直交させた座標面上に各個人の養育態度が布置される。それにより、養育態度は、養護-低得点 (以下、L とする) / 過干渉-高得点 (以下、H とする) 群、養護-H / 過干渉-H 群、養護-H / 過干渉-L 群、養護-L / 過干渉-L という4タイプに類型化される。

Parker (1979) は、PBI を用いて健常群と抑うつ神経症の患者群の青年が幼児期に受けた親の養育態度を検討した。その結果、抑うつ神経症の患者の母親の幼児期の養育態度は、養護得点が有意に低く、過干渉得点が有意に低いという結果が得られた。また、二群間における養育態度のタイプの出現頻度は有意な差があった。臨床群には養護-L / 過干渉-H 群に布置される母親が多く、対照群には養護-H / 過干渉-H 群、養護-H / 過干渉-L 群に分類される母親が多く見られた。こういった結果より、Perker はこの二軸の布置において原点に近いものを“平均的”と考え、養護-L / 過干渉-H 群を“情愛なき統御 Affectionless control”，養護-H / 過干渉-H 群を“愛情ある束縛 Affectionate constraint”，養護-H / 過干渉-L 群を“最適なきずな Optimal bonding”，養護-L / 過干渉-L を“きずなのなさあるいは弱さ Absent or weak bonding”と概念化している。

竹内ら (1989) や小川 (1991) はそれぞれ PBI の日本語版を作成し、妥当性・信頼性という点から検討を加えている。竹内ら (1989) の PBI 日本版では三因子が抽出されているが、小川 (1991) の PBI 日本版では『養護』と『過保護』という2つの因子からなることが確認されている。小川は健常高校生・短大

生を対象に、精神的な健康度を測定するコーネル・メディカル・インデックスで心理的に問題ないと判断される領域Ⅰ・Ⅱに該当する群と、患者ではないものの神経症傾向をもつと判断される領域Ⅲ・Ⅳに該当する群の間のPBI得点を比較した。領域Ⅰ・Ⅱの対象者の母親の養護得点は有意に高く、また有意ではないものの過干渉得点も高いという傾向が認められた。3週間の間隔をあけた再テスト法による信頼性の検討で、母親の養育態度の二つの得点共に高い相関が得られたこと(小川, 1991)、臨床群との間に幼少期の母親の養育態度に差が見られるということから、このスケールの有用性が確認されている。

PBIの質問項目は「望むだけの自由を与えてくれた」「過保護だった」といったように、具体的な状況を設定せず、かつ親の具体的な養育行動でもない内容が多く含まれる。そのため、客観的な親の養育態度そのものよりも、子どもがどのように母親のさまざまな行動を受けとめていたかという子どもの主観的な母親像がより鮮明にとらえられると考えられる。また、このスケールでは、「暖かく親しみのある声で話しかけてくれた」「私は求められていないと感じさせられた」という養育態度における情緒的な側面を重視していることも特徴である。

### 3. 養育行動を抽象的にアセスメントするもの

宮下(1991)は青年が現在までに母親から受けた養育行動を包括的に回想し、自己報告してもらう方法を開発した。この目的に適した方法として、母親の養育態度について、「安定した—不安定な」「子供中心の—大人中心の」といった形容詞対について評定を求めるという形式を採用している。

大学生が行った評定を因子分析した結果、三因子が抽出された。母親の養育態度は、「にこやかな—無表情な」「拒否的な—受容的な」といった項目からなる『情緒的支持・受容』、「感情的な—理性的な」「いらいらした—落ち着いた」という項目からなる『情緒的不安定』、「拘束的な—解放的な」「指示的な—非指示的な」という項目からなる『支配・介入』という構造を示すと報告されている。

EMBU尺度やPBIと同様に、このアセスメント法においても、母親の養育態度が『情緒的な暖かさ』や『養護』と類似したサポートティブな側面と、『過保護』や『過干渉』と類似したコントロールに関する側面とに分けられることが示された。それに加え、前述の二尺度にはみられなかった母親の養育態度を通じて子どもが感じる母親自身の情緒の安定性という側面がとらえられたということは興味深い。宮下のアセスメント法は、場面を全く限定せ

ず、客観的な個々の養育行動を尋ねないという形式のために、子どもの中に形成された主観的な母親像に焦点を当てた質問紙であると考えられる。その結果において、情緒の安定性が母親の養育態度の一面面としてあげられたということは、子どもにとって身近でかつ大きな存在である母親の機嫌のよさ・悪さ、またその変わり易さは、子どもを安心させたり、逆に不安を喚起したりすることに大きく影響する重要な要因であることを示していると考えられ、母子関係をアセスメントする際、考慮しなければならない点であろう。

## 母親イメージを通して母子関係をアセスメントする方法

養育行動の認知を通して母子関係をアセスメントするのは対極にあたる、子どもの持つ母親イメージ・母子関係イメージを通して母子関係をとらえる方法も開発されている。この方法には、言語を用いてそのイメージを見ようとするものとイメージを作品や描画に投影させるものに大別できる。

### 1. 母親との関係性からアセスメントするもの

佐藤(1994)は娘からみた母親イメージおよび母娘関係の中での自分自身のイメージをとらえる質問紙を作成した。まず、自由記述により「見守る母—支えられる私」といったような母親と自分との関係を表す修飾語を収集し、集められた項目を大学生女子に実施した。因子分析を行った結果、「支える母—もたれる私」「包む母—安心しきっている私」といった『母親依存』、「干渉する母—反抗する私」「権力を持つ母—反抗する私」といった『感情的衝突』、「見守る母—外に出る私」といった『距離の拡張』、「頼る母—支える私」といった『母親擁護』、『感情衝突』、『—(母), +(娘)の異質観』、『+(母), +(娘)の同質観』、『+(母), —(娘)の異質観』といった8つの因子が抽出された。

このようにして作成された38項目の質問に対し、0～3歳時、4～6歳時、小学時代、中学時代、高校時代、現在、将来という七つの時期ごとに想起・予測し回答を求めた。その結果、0～3歳時に最も高かった母親依存得点は中学時代まで低下し、その後横ばいになった。それに対し、0～3歳時に低かった距離の拡張得点は将来まで上昇し続け、それと同様に上昇していた感情的衝突得点は中学時代をピークに低下するという結果が得られた。

この研究では発達段階によって変化する母娘関係を検討を試み、その乳・幼児期から現在までの変容

が的確に捉えられている。ただし、言葉による表現のために、幼児期の母子関係とはこういうものという理想像が反映されやすいと考えられる。SD法を用いている似たような手法として前述の宮下(1991)の質問紙があげられる。しかし、佐藤のアセスメント法では「母-私」を対比させるという形式を採用したことから、母親と自分という二者の関係が明確にとらえられるものとなっている。佐藤は個人の発達的な変化を検討していたが、各個人特有の母子関係をとらえるという目的においても優れた手法であると考えられよう。また、この手法は母親との関係とそれに対応して、その関係性における自分自身のイメージを鮮明にとらえているといえる。

## 2. 母親との心理的な距離からアセスメントするもの

母子関係を理解する上で、二者間の関係と同様に重要な視点となってくるのが、その関係の緊密さ・近さである。このような視点から母親との心理的な距離をアセスメントするために、野本は「心理的距離テスト」を考案した。このテストの項目の一つに、調査対象者に「親があなたからどれくらい離れたところにいる感じがするか」を実験者が口頭で提示する1mm・1cm・1m・10m・100m・1000mの中から選択するよう求めるものがある。

野本(1997)は中学生・高校生・短大生・社会人の女性を対象としてこの手法による母子関係のアセスメントを試みている。発達的な観点からみると、高校生・短大生および社会人における最頻値は1mで、この値を対象の約半数が選択したのに対し、中学生は10cmが最頻値であった。また、家族の関係の中にその誘因があると考えられる摂食障害の女性患者と健常群の女性との比較も行っている。その結果、母親との心理的距離に関して、二群間に有意な差が見られ、健常群には3.3%しか見られなかった100m・1000mという回答が摂食障害群には31.1%もあり、摂食障害患者は母親を心理的に遠く感じている人が多いということが見いだされた。野本は摂食障害患者の臨床的印象から母親との心理的距離がもっと近く報告されると予想していたが、予測と反対の結果を示したことに、個人が感じている親との関係性を距離として表現する「心理的距離テスト」は、その判断の基準が個人に任せており、個人によって異なるものであることからおこたと考察している。つまり、摂食障害患者は近くに感じたい願望が強すぎるゆえに、またその願望を基準とするために、かえって母親を遠く感じるのではないかと考えられる。摂食障害患者が遠い距離に答

えた理由として、「自分が理解されていない」「親との交流が自分で思うほどにはなされていない」といったものが多くあげられたことから、この距離の遠さは摂食障害患者の家庭内での孤独感が表現されているといえる。

第三者が客観的に母親と子どもを見たときに感じる距離の近さ、母子間の密着を子どもの感じている疎外感・孤独感のあらわれであると考えたとき、このアセスメント法は子どもの感じている主観的な母親との距離をよく反映しているといえよう。このテストは直接的かつ簡便な方法ではあるものの、対象者自身が感じている親との関係性が距離という指標によってよくとらえられると思われる。

## 3. 作品からアセスメントするもの

水島(1986)は、被験者の内面や対象に対する感情のあり方をイメージ的に投影させ、表現させることを目的として図式的投影法を創案した。その一つである、円形駒と針金を用いて人間関係を表現する自己像単純図式は、母子関係をアセスメントするために用いることできる。自己像単純図式は、縦置きにしたB5用紙の上辺から2cmのところ「対象カード」を固定した台紙と、「自己の枠」をあらわす針金枠(標準は太さ0.9mmで長さ30cm)と一円玉大の「自己の核」をあらわす円形駒を用いる。被験者はその台紙の上に、針金枠と円形駒をおきながら、駒の位置・針金の形・開き具合などによって自己像を作品化することが求められる。

作られた図式(作品)の数量的分析の際の指標は、①枠内の核の位置、②対象と核の距離、③対象と枠の距離、④枠の開き、⑤核のずれ角度、⑥枠のずれ角度、⑦枠と核のずれ角度、⑧枠と開口部による角度という幾何学的なものである(水島・西高, 1981)。一般に、枠が閉じたり傾いていることが対象への否定的感情や不適応を表していること、枠や核と対象との距離が親近性や積極性を表すことが見いだされている。

この方法を用いて、草田・大平(1989)は、大学生120名を対象に対象カードを「母親」とした自己像単純図式と従来の母親イメージ尺度・母親依存尺度を実施し、そこに表現される母子関係を検討した。母親イメージに関して、肯定的感情得点は自己の核と対象カードとの距離との間には負の相関、自己の枠の開きとの間に正の相関があった。また理想化得点と自己の核と対象カードの距離との間にも負の相関があった。母親を肯定的、理想的なものとしている個人ほど、自己の核を対象カードに近く配置する傾向があった。

母親への依存に関しては、依存肯定・依存否定ともに自己の核と対象カードとの距離と負の相関があった。しかし、自己の枠の開きは依存肯定とは正の相関、依存否定とは負の相関が見られた。母親への依存を肯定的に評価していても否定的に評価していても、依存性の高い個人は母親の距離が近いことを表している。しかし、依存に対して肯定的にとらえている個人は自己枠の開きが大きく、否定的に評価している個人は自己枠の開きが狭いという傾向は依存を受け容れがたいものにとらえていることを表していると考えられる。

自己像単純図式において母親との関係を表現する上で、母親カードとの距離と自己の枠の開き具合が重要な役割を果たしていることが示唆されている。この手法はカード、駒、針金などを気持ちにぴったりにするよう、また実感がわか納得がいくまで、いろいろ試行錯誤できるという点ですぐれており(水島, 1993)、またアセスメントの道具という有用性を超えて、対象者にとっても自分の作成した自己像単純図式を目にすることで自分の母親との関係について洞察が深まるという点が特に有用であると思われる。

#### 4. イメージ画からアセスメントするもの

松尾(1998)は、子どもの中に形成された主観的な母親像をとらえるために、「円環母子関係イメージ画」を考案した。これは幼いころの母親イメージを母親と自分という二つの円を用いて自由にあらわしてもらい、描かれた二つの円の位置や大きさといった視点からアセスメントするものである。

大学生および専門学校生445名に「円環母子関係イメージ画」と母親の養育態度を測定する質問紙(宮下, 1991)を実施した(本研究では、円環イメージ画を描く際にイメージした母子関係について評定を求めた)。

描画しなかったものやイメージ画に不備があるものを除外し、390名のイメージ画を以下の観点から検討した。二つの円の関係については、一方の円が他方の中に含まれている・接している・交わっている・離れているといった基準により5つのカテゴリーを設定した。次に、子の円が母の円のどこに位置するかについて、二つの円の中心点を結ぶ線分の傾きから8つのカテゴリーを設定した。この二つ観点の組み合わせから描画タイプの分類を設定した。

分類の結果20名以上の対象者が描いていたタイプのイメージ画と母親の養育態度の評定を比較したところ、30項目中25項目に5%水準で養育態度得点に有意差が見られた。「落ち着いた—いらいらした」と

いう1項目を除くすべての項目で、子の円を母の円の中に描いた対象者は最もポジティブに母親の評定しており、幼児期に「母親に包まれていた」と感じ、母親を「安定して」おり「受容的である」とポジティブに認知していたと考えられる。それに対して、母親の円の真下に自分の円を描いた対象者は、多くの項目でネガティブに評定する傾向があり、母親は自分を見下ろすような存在であったと感じ、母親を「指示的」で「拘束的」であると認知していたと考えられる。しかし、「意欲的な—無気力な」「保護的な—自由な」という2項目については、この2タイプの得点は近似していた。母の円の下に自分の円を描いた対象者は、内包というイメージ画を描いた対象者と同様に母親を「意欲的で保護的」であると、その存在を近くに感じていながらも、その態度のうちに「否定的かつ拒否的」なものを感じ取っているという母親との関係へのアンビバレントな感情を反映していると考えられる。

これと似た手法で家族をアセスメントする「円による家族画」(竹内・上原, 1986, 上原・竹内, 1987)がある。これは「円でああなたの家族を描いてください」と教示のもとに描画を行うものである。

描画を系図型(家系図のイメージが描き出されているもの)、離合型(家族成員の個の確立を強調したもの)、交錯型(家族の情緒的なつながりがはっきり反映されているもの)、融合型(家族は一つの円として、その一体感が描かれているもの)など9タイプに分類した結果、家族の心理的つながりなどが強調される時には、離合、交錯、融合型になるという結果が得られた。「円による家族画」を用いた武内(1992)の研究によっても、離合・交錯・融合型には、家族間の心理的つながりが強調されるという結果が得られた。また、家族環境尺度との関連では、交錯型、融合型は凝集性が有意に高く、離合型は家族成員間の葛藤が有意に高いという結果が得られている。竹内らは、「円による家族画」に描かれた円の大小・位置関係・重なり具合などにより、それぞれの家族の関係の雰囲気伝わってくるし、家族という複雑な対象を円で描く作業の単純さゆえに被験者のとまどいも多いものの、家族の成員の細部の似姿が描写されるのでないだけに、そこに書き出されるのは関わりのある方そのものといえるのではないかと述べている。

このように、円環イメージ画は円によって関係をあらわしてもらうという簡便な方法であるが、対象者の中での母親の存在やその関係のイメージが二つの円の描かれ方によく反映されていると考えられる。前述の図式的投影法に近い方法ではあるが、円

環イメージ画には、母親の存在の大きさをあらわすと思われる円の大きさや関係の緊密さやつながりの深さをあらわす円の包摂といった独自の観点がある。今後、円環母子関係イメージ画について、二つの円の大きさやその比、距離、描画後のコメントという観点から詳細に検討を加えることで、そこにあらわされた母子関係をより鮮明にとらえることができると思われる。なお、約一割の対象者のイメージ画に不備があったことから、このイメージ画の教示の方法についてはさらなる検討が求められよう。

### まとめ

母子関係をアセスメントするために開発されたさまざまな方法をレビューしてきたが、一口に母子関係といっても、それぞれのアセスメント法によって対象としている次元が異なっていると思われる。それらには、実際に母親から受けた養育行動という表面的なものから、子どもの感じていた母親に対する感情を取り上げるもの、子どもの中に形成された母親像を対象にしているものまであり、アセスメントの目的にあわせてうまく使い分けることが必要となる。ここで取り上げたアセスメント法にはまだ十分に信頼性・妥当性が確認されていない方法もあるため、特に母子関係をイメージによってアセスメントする手法に関しては、今後さらなる検討が必要である。

一般に、客観テストを用いて母親の養育行動を通じて母子関係をアセスメントする場合、客観性は高いと考えられる。しかし、青年に自分の受けた養育態度の自己報告してもらうという形式をとる以上、アセスメントの対象とする行為の受け手である子どもが評定者でもあるため、あくまでも第三者の観察とは異なり、ある程度の認知の色づけを除外することはできない。また、質問紙法は、母親と子どもの間の雰囲気といったダイナミックなものを省き、親子間の行動のあり方だけを取り出しているために、親子関係の全体ではなく一側面しかとらえきれず、感情レベルでの親子関係をはかることができないという限界がある。例えば、「私自身に決定を下させた」という質問項目について「あてはまる」と評定していても、個々の関係の背景に子どもに対する無関心という雰囲気があるのか、受容的な雰囲気があるのかまではとらえきれず、その関係のニュアンスはそこには反映されないと考えられる。そういった点を重視したい場合、やはり投影法によってイメージをとらえるという方法が優れていると考えられる。しかし、母子関係のイメージを投影法を用いて

アセスメントする場合、青年のイメージ画や作品が実際の母子関係の何かを反映しているのか、あるいは距離や角度といったアセッサーが設定した指標で投影されたイメージをアセスメントできるのかといった疑問を生じさせる余地があり、その点の注意深い検討が求められる。

また、レトロスペクティブに尋ねるということから生じる青年のもつ母親との関係との認知がいつものものであるのかという問題をあげた。この問題については、現在の母親との関係が悪ければ、幼児期の母子関係の想起を求めても母親の悪い面ばかりが想起されやすくなると考えられるため、質問紙による客観的なアセスメントでも限界があるだろう。また、「円環母子関係イメージ画」では、有意な差ではないものの、女性に母親の円のなかに自分の円を描く対象者が多く、男性に母親と自分の円を離して描く対象者が多いという傾向が認められ、母-娘関係、母-息子関係といった子どもの性別の要因がその原因の一つとして想定される。このように、テスト時の感情状態や現在の母親との関係がアセスメントに影響するという過程は非常に複雑な問題であり、レトロスペクティブに母子関係をアセスメントする上で、今後十分に検討する必要がある課題である。

### 引用文献

- Arrindell, Perris, Perris Eisemann, van Der Ende, van Knorring 1986 Cross-national Invariance of Dimensions of Parental Rearing Behavior: Comprison of Psychometric Data of Swedish Depressive and Healthy Subjects with Dutch Target Rating on EMBU British Journal of Psychiatry 148 305-309
- 門脇真帆・染矢俊幸・高橋三郎 1997 親の養育行動に及ぼす子の性別・出生順位および同胞の数と性別の影響 精神医学 39(9) 961-969
- 草田寿子・大平英樹 1989 図式的投影法の妥当性の検討 - 母子関係を表す単純図式投影法について - 家族心理学研究 3(1) 23-32
- 松尾和美・小川俊樹 1998 円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係(1) 日本心理学会第62回大会発表論文集 p.278
- 水島恵一 1993 図式的投影法 (心理検査学 岡堂哲雄編 第4章 垣内出版)
- 水島恵一・西高慶子 1981 自己像単純図式投影法体験と意識に関する総合研究 第3集 文教大学人間科学研究会 237-240

- 森下正康 1981 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達の研究 和歌山大学教育学部教育科学 30 43-55
- 野本文幸 『心理的距離テスト』の試み 摂食障害45例, 他の非精神病性疾患45例, 正常対照群286名の比較 1997 精神医学 39(4) 403-413
- 小川雅美 1991 PBI(Paretal Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学 6(10) 1193-1201
- Parker. G 1979 Parental Characteristics in Relation to Depressive Disorders British Journal of Psychiatry 134 138-147
- Perris·Jacoboson·Lindstrom·von Knorring·Perris 1980 Development of a new Inventory assessing memories of parental rearing behavior Acta Psychitry Second 61 265-274
- 佐藤枝里 1994 大学生女子の抱く母娘関係イメージの質的変容 日本教育心理学会第36回大会論文集 189
- 染矢俊幸・高橋三郎・門脇真帆・Reist C・Tang SW 1996 EMBU 尺度(養育体験認知に関する自己記入式調査票)の日本語版作成と信頼性検討 精神医学 38(10) 1065-1072
- 竹内美香・鈴木忠治・北村俊則 1989 両親の養育態度に関する因子分析的研究 周産期医学 19(6) 108-112
- 竹内和子・上原明子 1986 円によって描かれた家族のイメージ 日本教育心理学会第28回発表論文集 p.422-423
- 上原明子・竹内和子 1987 円によって描かれた家族のイメージ(その2) 日本教育心理学会第29回発表論文集 p.632-633

-1998. 9. 30 受稿-